

奥村教授退任記念論文集の刊行に寄せて

経済学部長 杉野 園 明

奥村剋三教授は1998年の3月でご定年を迎え、立命館大学を退任致します。この機に、立命館大学経済学部は、『立命館経済学』の特集を編集し、これを先生のご退任記念論集として刊行致すことになりました。

先生は、1933年、京都市でお生まれになり、1951年には大阪外国語大学に入学、1955年には早稲田大学大学院文学研究科（ロシア文学専攻）に進学されました。1957年に大学院を終了したのちは、劇団『人間座』に所属し、演劇活動に従事致しております。この間、モリエール作の『孤客』で舞台監督を勤めたのははじめ真船豊作の『遁走譜』やクプリアノフ作の『わたしの兄弟』（翻訳、演出）など実に多くの演劇ですぐれた業績を残されました。

1973年になって、福井大学の教育学部に助教授として就任され、1977年4月に立命館大学経済学部へ赴任され、1979年には教授に昇任しました。

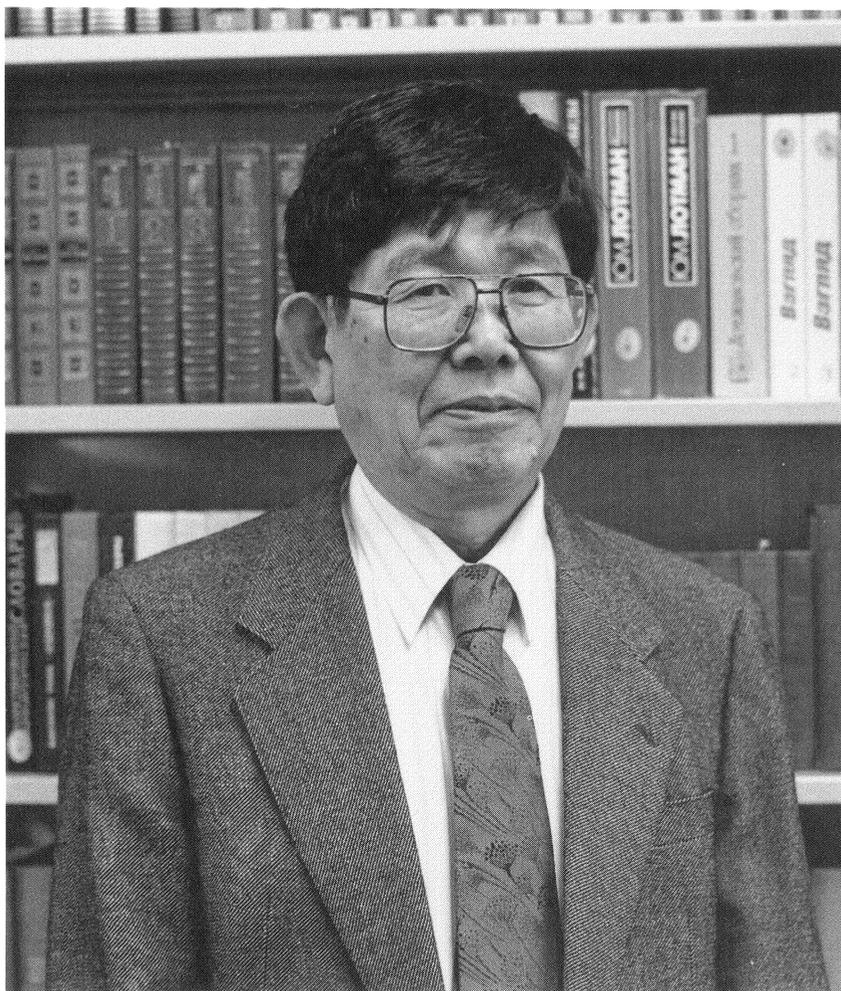
先生のご専門はロシア文学であり、とくにプーシキンやトルストイの著作に関するご研究には内外からの名声を博しており、さらにロシア文学の底流に流れるロシアの自然や社会にも鋭い目を向け、いわゆる「ロシア学」といった大局観に満ちた総合的な研究を進めてきました。その論文数は20点を越え、ロシア語からの翻訳も同じ数ほどあります。先生はまた、日本ロシア文学会や日本プーシキン学会などで発表することも多く、1977年から1990年までの長きにわたって日本ロシア文学会の評議員を勤めるなど、現代の日本を代表するロシア文学の研究者であります。

立命館大学にあって、先生は1984年に学部主事、1987年は教職員組合委員長、さらに1991年からの2年間は国際言語文化研究所長の重責を果たされたのはじめ、経済学部調査委員長、外国語科連絡協議会調査委員長、国庫負担委員会副委員長など、大学運営にとって重要な役職を歴任してきました。

先生は、明るく何事にも楽観的で、学部運営のあり方や大学の発展方向について、いつも貴重なご意見や検討すべき多くの問題を提起し、立命館大学と経済学部の発展に大きな功績を残されました。

このような学問と教育活動、あるいは大学の一般業務に果たしてきた先生の功績を思うとき、先生の退任は誠に惜しむべきことであります。幸いにして、1998年からは立命館大学の特任教授に就任することが決定しております。今後とも、学術研究をはじめ多方面にわたるご活躍を期待いたしますと同時に、末永くご健康でありますよう祈願致します。最後になりますが立命館ならびに経済学部に対してもご指導、ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

1997年12月24日



奥村 剋三教授 近影

(1997. 12. 小原輝三氏撮影)